

ホレおばあさん

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

ある後家^{ごけ}さんに、ふたりのむすめがありました。そのうちのひとりにはたらきもので、美しい子でしたが、もうひとりはみにくいうえに、たいへんななまけものでした。

けれども、後家^{ごけ}さんはこのみにくいなまけものの子をずつとかわいがつていました。だって、この子はじぶんのほんとうのむすめなんですからね。もうひとりの女の子のほうは、うちじゆうのしごとをなにからなまでにやって、年がら年じゆう、灰^{はい}だらけになつていなければなりませんでした。

かわいそうな女の子は、まい日大通りへでて、泉^{いずみ}のそばにこしをおろして、指^ちから血^ちがでてくるほど、たくさんの糸をつむがな

ければなりませんでした。

さて、あるときのことでした。糸巻いとまきが血だらけになりましたので、女の子は泉いずみにかがみこんで、糸巻きをきれいにあらおうとしました。ところが、糸巻きは女の子の手からするつとすべつて、泉のなかにおちてしまいました。

女の子は泣なきながら、ママ母のところへかけて行って、とんでもない失しっばい敗ばいをしたことを話しました。ところが、ママ母は女の子をひどくしかりつけました。しかも、女の子をすこしもかわいそうだななどは思わないで、こういいました。

「糸巻いとまきはおまえがおとしたんだから、じぶんでひろつといで。」
こういわれて、女の子はすすごと泉いずみのところへひきかえしま

した。けれども、どうしていいのかわかりません。とうとう、思
いあまつて、女の子は糸巻きをとるために、泉のなかへとびこみ
ました。と、女の子は気をうしなつてしまいました。

やがて、ふと気がついて、われにかえつたときには、どうでし
よう、女の子は美しい草原くさはらに
いるではありませんか。お日さま
はきらきらかがやいて、あたりには何千という花がさきみだれ
ているのです。

女の子がこの草原を歩いていきますと、やがてパン焼やきかまど
のあるところへきました。かまどのなかには、パンがいつぱいは
いっていました。ところが、そのパンが大きな声でよびかけまし
た。

「ああ、ぼくをひっぱりだしてください。ひっぱりだしてください。でないと、ぼくは焼^やけ死^しんでしまいます。もうとつくに焼^やけあがっているんですもの。」

それをきいて、女の子はそのそばへ行って、パン焼きにつかう小さなシャベルで、パンをひとつのこらずじゅんじゅんにだしてやりました。

それからまた、女の子はずんずん歩いていきました。やがて、リングがすずなりになっている一本の木のところへきました。すると、そのリングが声をはりあげて、よびかけました。

「ああ、わたしをゆすってください。わたしをゆすってください。わたしたちリングは、もうみんなじゆくしきっているんです。」

そこで、女の子が木をゆすつてやりますと、リンゴはまるで雨のように、ばらばらとふつてきました。女の子は、こうして木にリンゴがひとつもなくなるまで、ゆすつておとしてから、それをひと山につみあげました。そうしておいて、女の子はまたさきへ歩いていきました。

さんざん歩いたすえ、女の子はようやく一軒けんの小さな家のまえにきました。家のなかからは、ひとりのおばあさんがのぞいていました。ところが、そのおばあさんの歯はがあんまり大きいものですから、女の子はすっかりこわくなって、にげだそうとしました。すると、おばあさんがうしろから大きな声でよびかけました。

「なにがこわいの、おまえ。わたしのところにおいで。おまえが、

うちのしごとをなんでもちやんとしてくれるつもりなら、きつとおまえをしあわせにしてやるよ。おまえはね、(1)わたしの寝床をきちんとして、それをよくふるって、羽根がとぶようによく気をつけてくれればいいんだよ。そうすれば、人間の世界に雪がふるのさ。わたしはホレおばあさんなんだよ。」

おばあさんは、いかにもしんせつにいつてくれます。そこで、女の子は思いきつておばあさんのいうことをきいて、このうちに奉公することにしました。

女の子は、なんでもおばあさんの気にいるように、よく気をつけました。寝床もいつも力いっぱいふりましたから、羽根が雪のひらのように、あたりにとびちりました。おかげで、女の子は

おばあさんからのごとひといわれることもなく、まい日まい日、煮たり焼いたりしたごちそうを食べて、たのしくくらしていました。

こうして、女の子はしばらくのあいだホレおばあさんのところにいましたが、そのうちに、なんとなくなくなってきました。はじめのうちは、どういうわけなのかじぶんでもわかりませんでした。とうとう、生まれたうちがこいしくなってきたのだということに気がつきました。ここにいるほうが、うちなんかにいるよりも何千ばいしあわせかわからないのですが、それでもやつぱり、うちへかえりたくなつたのです。それで、とうとう、女の子はおばあさんにじぶんの気持ちを話しました。

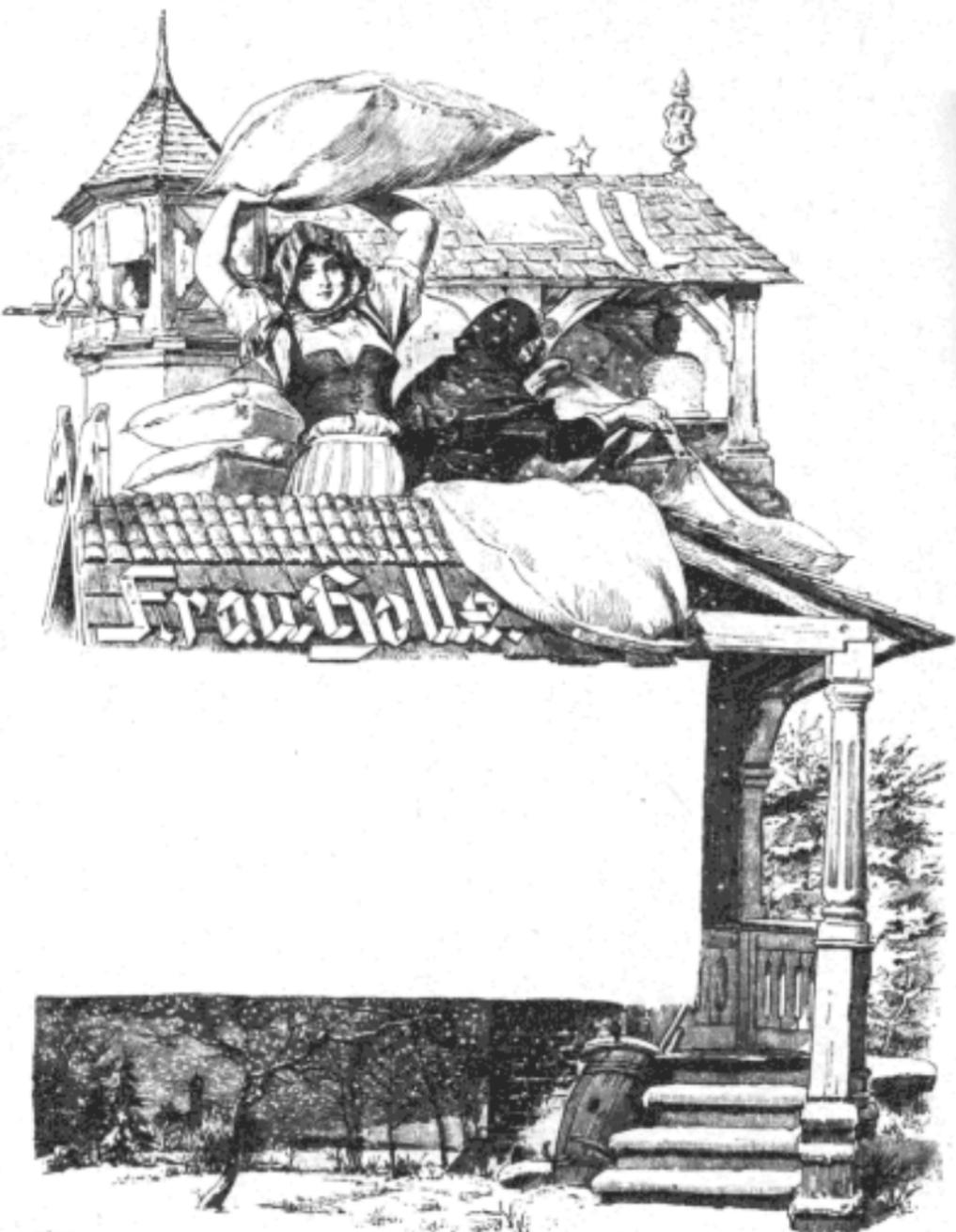
「あたしはうちへかえりたくってしかたがないんです。地面じめんの下
のここにいるほうがしあわせでしょうけども、もうどうにもがま
んができないんです。どうしても、地面の上のうちの人たちのと
ころへいかずにはいられません。」

すると、ホレおばあさんはいいました。

「おまえがうちへかえりたくなつたとは、うれしいことだね。お
まえはほんとうによくはたらいてくれたから、わたしがおまえを
上までつれていってあげよう。」

こういって、おばあさんは女の子の手をとって、大きな門のま
えへつれていきました。

門がひらかれて、女の子がちょうどそのままに立ちますと、金きん



の雨がはげしくふってきました。そして、その金きんがみんな女の子のからだにくつつきましたので、女の子はからだじゅう金だらけになりました。

「それはおまえにあげるよ。ほんとうによくはたらいてくれたからね。」

と、ホレおばあさんはいいました。

それから、おばあさんは、女の子の手から泉いずみのなかへすべりおちた糸巻いとまきもかえしてくれました。そのとき、門がしまりました。と、いつのまにか、女の子は、地面じめんの上の人間の世界せかいに、それもおかあさんの家いへからあまり遠くないところにあがっていたのです。女の子が家の庭にわのなかへはいりますと、井戸いどの上うへにいたオンド

リがなきさけびました。

コケツコツコー

金きんのじようさまのおかえりだあ

女の子はうちのなかへはいつて、おかあさんのところへいきま
した。ところが、こんどは、女の子がからだじゆうに金をつけて
いるものですから、おかあさんも妹もさかんにちやほやしてくれ
ました。

女の子はいままでのことをのこらず話しました。おかあさんは、
この子がどうしてこんな大金おおがねも持ちになったかを、ききますと、
もうひとりのみにくいなまけものの子にも、おなじしあわせをさ
ずからせてやりたいと思いました。

こうして、もうひとりの女の子は、おかあさんのいいつけで、泉いずみのそばにすわって、糸をつむぐことになりました。

女の子は糸巻いとまきを血ちだらけにするために、じぶんの指をつきさして、手をイバラの垣かきのなかにつっこみました。それから、糸巻いずみきを泉いずみのなかへほうりこんで、すぐそのあとからじぶんもとびこみました。

この女の子も、まえの子とおなじように、いつのまにか美しい草くさはら原はらにきていました。そして、おなじ小道を歩いていきました。女の子が、あのパン焼やきかまどのところまできますと、またまたパンがさげびました。

「ああ、ぼくをひっぱりだしてくださあい。ぼくをひっぱりだし

てくださいあい。でないと、ぼくは焼^やけ死^しんでしまいます。もうとつくに焼^やけあがつているんですもの。」

ところが、それをきいた女の子は、

「あたし、じぶんのからだをよごすのはいやよ。」
と、いいすてて、さっさと行ってしまいました。

それからまもなく、あのリンゴの木のところへきました。すると、リンゴが大声でよびかけました。

「ああ、わたしをゆすってください。わたしをゆすってください。わたしたちリンゴは、もうみんなじゆくしきつているんです。」
ところが、女の子はこたえていいました。

「なにいつてんのよ。そんなことをすれば、あたしの頭におっこ

ちるかもしれないじゃないの。」

こういつて、女の子はずんずん歩いていきました。やがて、ホレおばあさんの家のまえまできました。女の子は、おばあさんの歯はがとつても大きいことは、もうまえからきいていましたので、ちつともこわがりませんでした。そして、すぐにおばあさんのところに奉ほうこう公することにしました。

女の子は、はじめの日は、むりにせいをだして、おばあさんのいうとおり、いっしょうけんめいはたらきました。だって、こうすれば、おばあさんがお金かねをたくさんくれるだろうと思つたからです。

けれども、二日めになると、もうなまけだしました。そして三

日めには、もつとなまけて、朝になつても、どうしてもおきようとはしませんでした。

ホレおばあさんの寢床ねどこをきちんとなおすことは、この女の子のやく役めになつていたのですが、それもしませんでしたし、羽根はねがまいあがるほど、その寢床をふるいもしませんでした。

ですから、たちまち、ホレおばあさんのほうでまいつてしまつて、もうはたらいてくれるのはけっこうだ、と女の子にことわりました。

それをきいて、なまけものの女の子はすっかりよろこびました。きつと、いまにも金きんの雨がふつてくるだろうと思つたのです。

ホレおばあさんは、この子もじぶんで門のところへつれていっ

てやりました。ところが、女の子が門の下に立ちますと、こんどは金のかわりに、大がまにいつぱいはいったチャンを、ざあつとあびせかけられました。

「これが、おまえのしてくれたしごとのほうびだよ。」

ホレおばあさんはこういふと、門をしめてしまいました。

こうして、なまけものの女の子はうちへかえってききましたが、からだじゆう、チャンだらけになっていました。井戸いどの上うへにいたオンドリがそれを見て、なきさけびました。

コケツコツコー

きたないじようさまのおかえりだあ

このチャンは女の子のからだにこびりついてしまつて、
一いっしょ

生うのあいだどうしてもとれませんでした。

(1) ですから、この話のでどころのヘッセン地方ちほうでは、雪がふるとき、ホレおばあさんが寝床ねどこをなおしている、といえます。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集（一）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

入力：sogo

校正：チエコ

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

ホレおばあさん

グリム Grimm

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 矢崎源九郎訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>